我が国の四輪モータースポーツ文化と課題
―スポーツ文化体系によるレースの考察―

スポーツビジネス研究領域
５００９Ａ０６１－２　中島　和輝　　　研究指導教員：木村 和彦 教授

緒　　言

1960 年代に確立した我が国のモータースポーツは、これまでしばしば経済や環境保護の理由から、社会からの批判の対象となってきた。また近年では自動車そのものに対する人々の興味・関心が薄れ、「若者のクルマ離れ」も生まれている。

こうした現状に対し田中ら(2010)は、参加者や観客をも含めたモータースポーツの社会的な価値を高めることが、持続性の観点から大変重要になると述べている。

競技の特異性

あらゆるスポーツ競技が人間の身体を用いて行われる以上、いずれの競技においても「力」は基本要素の１つである。この点を踏まえ齋藤(1984)は、「通常のスポーツ競技の場合、その力の源泉は筋力であって、『用具』はあくまでも用具に過ぎない。これに反し、モータースポーツでは用具そのものが力の源泉であって、体力や筋力とは異なり、科学の進歩がある限り、力の面からは記録の限界が無い」と述べ、これをモータースポーツの特異性として挙げた。

研究目的

スポーツの社会的価値について言及するには、そのスポーツ固有の文化を理解することが重要となる。佐伯(1984)はスポーツの文化について、「社会的諸要因と相互に関連しながら自己の体系を維持し、スポーツに意味と価値を付与し、スポーツ活動を秩序付け、統御し、スポーツの世界を社会的に肯定されるものとして構成するように働く」と定義した。

現在、モータースポーツの文化について論じた学術論文はまだ少なく、特にスポーツ文化の見地から論じたものは見当たらない。そこで本研究は、日本のモータースポーツの文化構造を明らかにするとともに、現代の日本のモータースポーツが抱える諸課題について、スポーツ文化体系の観点から解決策を講じることを目的とする。

先行研究

佐伯(1984)は、スポーツが文化的な側面を持つことに着目し、スポーツの文化を、観念的な文化的構成要素（スポーツ観）、行動様式としての文化的構成要素（スポーツ規範、スポーツ技術・戦略・戦術）、及び物的事物としての文化的構成要素（スポーツ物的事物）の４要素から構成されているものとし、これらの構成要素の相互の関連を１つの体系にまとめ、スポーツ文化体系のモデルを提唱した。（図１）

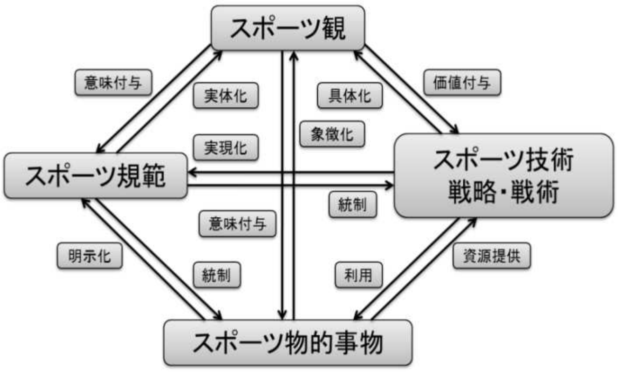

図１：佐伯のスポーツ文化体系

研究方法

研究方法には文献研究を採用した。収集した文献はスポーツ科学、及び社会学に関する研究論文をはじめ、モータースポーツを取り扱った自動車産業研究論文や出版物、新聞記事である。また研究に必要な競技情報については、競技関係機関のウェブサイトからも情報を収集している。

また本研究では佐伯(1984)のスポーツ文化体系モデルを参考としつつも、モータースポーツ文化の研究には、競技の特異性が踏まえられるべきであると考えた。そこで本研究では、競技独自の文化体系の仮説モデルを提案した。（図２）

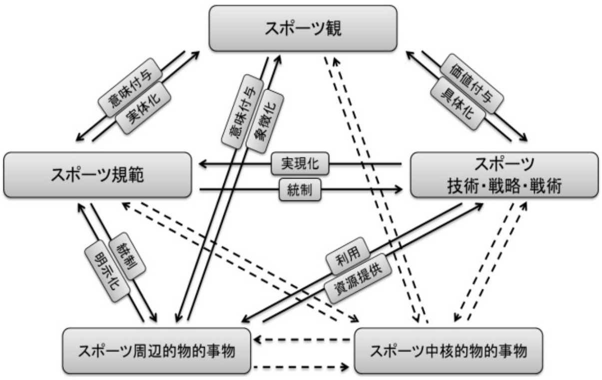

図２：モータースポーツ文化体系の仮説モデル

図２のモデルは、佐伯(1984)のスポーツ文化体系のモデルにおいて「用具」が該当していたスポーツ物的事物を、「マシン＝スポーツ中核的物的事物」と「マシン以外の物的事物＝スポーツ周辺的物的事物」とに区別することで、モータースポーツの文化が５つの要素から構成されると主張するものである。

モータースポーツ文化体系の完成

スポーツ中核的物的事物（マシン）はスポーツ観が提示する価値を、スポーツ規範が定める規則の範囲内で具体化され、スポーツ技術・戦略・戦術によって利用される。またマシンはサーキットにおいて用いられるため、スポーツ中核的物的事物とスポーツ周辺的物的事物との間には、環境の利用と提供という相互関係が見出せる。

以上のことからモータースポーツ独自の文化体系についても、それぞれの構成要素が相互に関連しあう１つの体系モデルとして記述することができた。（図３）

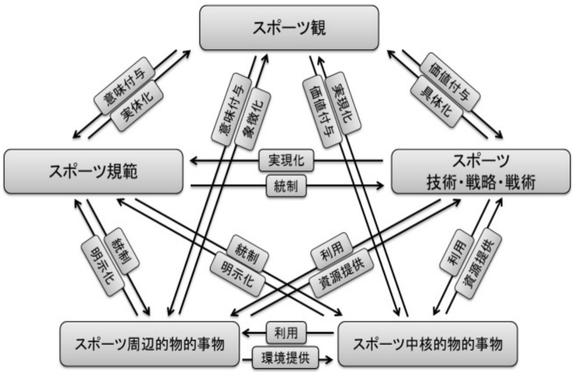

図３：モータースポーツ文化体系

スポーツ観に関する課題

人々がモータースポーツに参加しそのスポーツ観を体験する機会を失っており、また同時にモータースポーツがその観念を社会に主張する機会を失っている。この事実こそが現在のモータースポーツが抱えている最大の問題である。

スポーツ規範に関する課題

現在の国内のレースで施行されている「ウェイトハンデ制」や「オーバーテイク・システム」は、スポーツ観を正しく実現化したものとは言えない。本来、スポーツ規範はスポーツ観を反映させた形で実体化されなければならず、またそれはマシンの性能向上にも優先して達成されなければならないものである。

スポーツ技術・戦略・戦術に関する課題

マシンが機械である以上、ドライバーの操作によるマシンの挙動には不確実性が存在しない。またサーキットが閉鎖された周回路である以上、マシンはレコードラインを繰り返し走ることになるため、レースは非再現性に乏しい展開にならざるをえず、観戦者を飽きさせてしまう。これらがモータースポーツの持つ本質的危険性である。この競技の本質的性格に起因する問題の解決は、規範の改善によって行われていくべきである。

スポーツ周辺的物的事物に関する課題

多様な事物からなるスポーツ周辺的物的事物の中でも特に課題として挙げられるのは、サーキットと周辺地域との協力不足、マスメディアとモータースポーツ業界の連携不足、そして、人々がレースを楽しめる環境の不在である。これらは個別の問題ではあるが、いずれも社会の人々をモータースポーツへと導く重要な機能を持つため、至急、解決が達成されるべき課題である。

スポーツ中核的物的事物に関する課題

モータースポーツは「走る実験室」と呼ばれているが、そこには「走る実験室」のコピーを用いなければモータースポーツを肯定できない日本の社会や企業の価値観がある。日本のモータースポーツが今後も発展し続けるためには、エコロジー技術開発への貢献に努めなければならない。「走る実験室」として技術開発の最先端となるべく、次世代動力源開発を市販車に先行して進めなければならないだろう。